

助成年度：平成4年度

[所属] 三重大学 医療技術短期大学部
[役職] 助教授
[氏名] 代表者 武笠 俊一 (他計2名)

[課題]

海に生きる女性の「健康と環境」をめぐる比較生活史研究

－志摩半島の観光開発が鮑潜水漁に与えた影響－

[内容]

本調査が対象地とした「石鏡」と「国崎」は、志摩半島の先端部に位置する小さな漁業集落である。われわれは、この地域における海女の生活史を聞き取ることによって、伊勢志摩地域における観光産業の発展と資源・環境の問題がいかなる内的関連を持っているかを探ろうとした。

近年の志摩の観光産業の特質は、その観光資源が漁業と不可分に結びついている点にある。同じことを逆の視点から見れば、観光開発によって、この地の漁業の「観光産業化」が進展したのである。

志摩の漁村は、一見ただけでは観光客にとってそれほど魅力があるようには見えないが、それでも四季を通じて観光客のとぎれることはない。その理由は、じつは豊富で安価な「民宿の磯料理」と漁師がアルバイトで操業する「遊覧船による海釣り」の2つにある。ともに、「伊勢湾口」という世界有数の好漁場を背景にもつことが利点となって、都会からここへ観光客を引きつけることが可能となったのである。

「漁業」そのものが観光資源であること、観光産業が漁業とは完全に切り放されてはいない人々によって担われてきたことによって、「環境と資源の保護」は、志摩地方の人々にとって以前にもまして切実な問題となっている。

資源の保護にもっとも適したシステムをもつ海女潜水漁業は、むしろ観光産業の発展と共存の関係にある。新しい参入者を結果的に排除するシステムが、観光ブームによる漁獲物の高値にもかかわらず、アワビ、サザエ、伊勢エビ等もっとも枯渇の危険の高い資源の保護に貢献したのである。海女の高齢化も実は、漁労用具の選択的な導入と強い操業規制によって壮年層が排除された結果である。

志摩半島の観光産業の優位性は、伊勢湾口の豊かな漁場を背景とする漁業に由来している。しかし、この利点は、歴史的建造物や美しい景観のように観光客の目に直接訴えるものではない。そのために海産物の新鮮さと豊饒さとシンボルとしての「海女」が志摩の観光業の宣伝に多用されるようになった。

志摩の漁業が観光産業に従属しはじめた時、実体とはかけ離れた美しい「海女」のイメージが形成されはじめたのである。